



Be creative!



学校は愛にあふれている—ひとりひとりを見つめて

今月の「校長室だより」は2年生の学年通信をお借りすることになりました。「2学年通信NO9」のタイトルは「一丸」。つい先日、本校史上初の「夏の甲子園県大会シード校」を獲得した野球部の活躍が取り上げられています。学年主任の清木先生が3人の野球部員2年生の杉本君、内藤君、森田君にインタビューをしました。彼らは「スタンドメンバー」。野球部顧問の神谷先生によれば、「太鼓をたたいたり、大声で応援をしたり、



とにかくチームを盛り上げる役割を担う」大事なメンバーとのこと。この3人は、チーム内では『デカメン3兄弟』と呼ばれる BIG な生徒たち。彼らの応援は確かに迫力があります。相手に押されているときは、部員だけではなく、他の観客も巻き込み、応援する私たちにも元気と勇気をくれます！現に、インタビューの中の「応援の流れを自分たちが作ったぜ！という瞬間はあるの？」という清木先生の質問に彼らはこう答えています。

「ありますよ！（3人とも大きくうなずく）ベスト8を決めたのが中部大第一高校との試合だったんですが、3点差で負けていたんですよ。でも流れを変えよう、切り替えよう、と応援の声をめちゃくちゃ大きくしたんです。ベンチの声も大きくて、ベンチもスタンドも一丸となって思いっきり応援しました。自分が、と言うよりはみんなで思いっきり。その結果、流れが変わりました！一体感がありました！」

私もその場にいましたので、この時の様子はよくわかります。格上の相手に大人はすぐにあきらめがちですが、彼らは違う。『諦めたらあかん！同じ高校生、きっとやれる！』そんな思いをスタンドにいるすべての人たちにかき立たせてくれる応援でした。



部員全員が背番号をもらえるわけではありません。彼らもあと少しというところで、今回は背番号を手にする事ができませんでした。清木先生は心配します。

「『なんであいつが背番号をもらえるんだ。俺のほうが…』って思ったりするの？」こんなこと生徒に聞いたりしたらまずいかな…恐る恐る尋ねた質問に彼らは答えます。

「そんなことはまったく思いません。やっぱり上には上がいます。次こそは背番号をもらえるように練習を頑張るぞ！という気持ちがあるだけです。」

迷いなくきっぱりと言い切る彼らの姿から清木先生は「常に挑戦者であろう」とする生徒の姿に感動します。その清木先生の言葉です。

「やっぱりスタンドメンバーに話を聞いてよかった。世の中ではリーダーの方に目が行きがちだけど、そのリーダーの活躍の背後には、優れたフォロワーが絶対に存在している、と僕は思っている。逆に言うと、フォロワーが貧弱だとその組織も貧弱なんだよね。」



「今日はインタビューに答えてくれてありがとう。お礼にこれをあげる。」彼らが手にしたのは「元素の周期表」のプリント。清木先生らしい喜びと愛情の表現です。

このインタビューはたまたま清木先生と神谷先生がお昼ごはんを共にした時の話題からスタートします。**「野球部のことを書くな、彼らに話を聞いてやってくださいな。」**と神谷先生。ちょうどインタビューの最中に、その神谷先生が近くを通られた時のこと。清木先生が「この3人に期待することはありますか。」と神谷先生に聞きます。その時の神谷先生の言葉です。

「すべて。野球も、勉強への姿勢も、環境整備も、リーダーであつたり、フォロワーであつたり。この3人は、できていないことはできていないと、自分を見つめることができます。ごまかすことは絶対にしません。」この清々しい神谷先生の返答にも、そしてこの神谷先生の返答に「この3人はめちゃくちゃ信頼されているなあ」と率直に感動する清木先生にも、お二人の「生徒への愛情」が強く感じられます。



今回、この通信に「学校は愛にあふれている」という仰々しいタイトルをつけましたが、これは私の素直な思いです。ひとりひとりの生徒の活躍に注目しようとする先生方のみならず、野球部を支えるために自分の力を存分に発揮しようとする生徒たちの様子にもあふれる愛を感じます。この学年通信は、このGW中に活躍をしたテニス部(男子知多地区優勝)や陸上部(男子知多地区総合3位・女子総合1位)へのインタビューへと続いていき

ます。5月を迎え、中間試験も近づいてきました。3年生は受験へと準備を進めます。教室の片隅で、職員室前の机で、黙々と努力する生徒もいます。一人一人の生徒たちに向けて、学校中が愛であふれますように、と願います。そして、私もまた、人知れず、生徒たちを暖かく見守る先生の心に気づくことのできる校長でありたいと深く願っています。



今月の言葉 I'm glad we came.一きてよかったね。

この言葉は、あの『沈黙の春』で有名なレイチェル・カーソンのもう一つの代表作『The sense of Wonder』の中で、カーソンの甥っ子のロジャーがつぶやく言葉です。若き研究者・森田真生氏が2020年から翻訳に取り組む中で、どのように翻訳をすることがこの時のロジャーの思いに近接することになるのか、悩んだという言葉でもあります。病弱であった2番目の姉に代わり、カーソンはこの甥っ子とたくさんの時間を共に過ごします。ある満月の夜、カーソンの愛するメイン州の海辺で、ロジャーは彼女の膝の上に座って「I'm glad we came.」とささやく。森田氏は「作品の中でとりわけ印象的な場面だが、この言葉をどう訳すか、長い間悩み続けていた」と言います。「英語で明示される『We』のニュアンスを、日本語にどう訳すかが特に難しかった。」と自分の思いを述べています。森田氏は、自分の次男が3歳だったころ、光が差し込む景色を見て、彼が言った「きてよかったね」という言葉が、その次男の声のまま、ふと自分の頭に浮かんだと言います。ロジャーは海辺で美しい景色を見てうれしかった。だが、それだけではなく、「ロジャーが来てくれてよかった。」とカーソンが感じていることも彼は感じとっていた。どちらの喜びとも言えない2人の喜びが、「よかったね」の「ね」の中にこめられていると思い、森田氏はこの次男の言葉をロジャーの言葉の翻訳として採用します。これからやってくるすべての人たちが、心から「きてよかったね。」と思える世界をつくりたい—これこそがこのテキストにカーソンが込めたビジョンだと森田氏が確信した瞬間でもありました。

